



“地芳の滝”

幻の滝 “^{じよし}地芳の滝”

越知町西部の大平地区の北方に、険しい横倉山系の中でも一際目に付く岩場である大平山（1009.3m）が聳え、その南壁は高さ150^{メートル}にも及ぶ断崖絶壁になっていて圧巻である。そのちょうど中程当りの凹んだ所を落下するのが「地芳の滝」（または「千代士が滝」）〔落差：70～100^{メートル}〕である。上流には沢の跡があり、かつてはたえず水が滴り落ちていたと思われるが、人工林に変わって保水力がなくなったせいか、余程の大雨の時でない限り水を落下することはなく、普段は滅多に滝を見ることはできない“幻の滝”である。以前はここでロッククライミングをするクライマーもいたと言われる程の急崖である。

この滝と思われる滝（地元の大毘羅神社に伝わる『古鏡記』では「志由路ノ滝」）の下で、江戸時代の天保3（1832）年に、大平地区の百姓が畑を開墾中に偶然見つけたと言われる「六花形湖州古鏡」（湖州鏡）が地元で伝わっている。湖州鏡とは、中国宗代（平安末～鎌倉前期）に、浙江省湖州で製造されたもので、日本の和鏡に大きな影響を与えた名鏡と言われる。高知県では5面見つかっているが、六花形のもは土佐神社（土佐一ノ宮）のものを含め4面しか存在しない大変珍しい古鏡である。このような珍しい古鏡が何故このような人里離れた山の中から見つかったのか、その理由については今のところはっきりしていない。

可能性として考えられることは、横倉山は平安時代には土佐国唯一の修験道の霊場であったので、横倉山系のこの険しい岩場も恐らく修験道のコースの一部であって、鏡は修験者の所持品であったのかもしれない。鏡は本来信仰の対象であって、修験者たちは常に身に付けていたからである。

この“地芳の滝”の断崖の下を、隣の旧仁淀村（仁淀川町）へ抜ける旧「森往還」（街道）が通っている。仁淀村地区の人々が越知町へ、和紙や紙幣の原料であるコウゾ、ミツマタや茶・木炭を背負ったり、牛馬に積んで運んで来て、その代わりに米や醤油を買って帰って行ったという。牛馬が滑らないために設けたのか、一部に石畳が残っていたり、岩陰には石仏が安置されていたりして、当時の面影を偲ばせている。

横倉山には、この他「森往還」とは別に、“地芳の滝”のある大平山のすぐ北の東西方向の尾根に沿って“三嶽越え”と呼ばれるかつての参拝道が走っている。地元越知町や旧仁淀村方面の人々が杉原神社への参拝のために使用した道とされており、さらに古くは、源平の戦いに敗れた安徳天皇と平家一門の一行がこの道を通って横倉山へ落ち延びてきたと言われており、最近“三嶽古道”として地元の「越知平家会」が中心になってかなり整備され、古道が蘇りつつある。

日本最古の陸上植物化石・^{りんぼく}鱗木

安井 敏夫

わが国で最も古い陸上の植物化石は、古生代デボン紀後期〔約3億6000万年前〕のヒカゲノカズラ類に属する「鱗木」(属名: *Leptophloeum*) と呼ばれるものである。

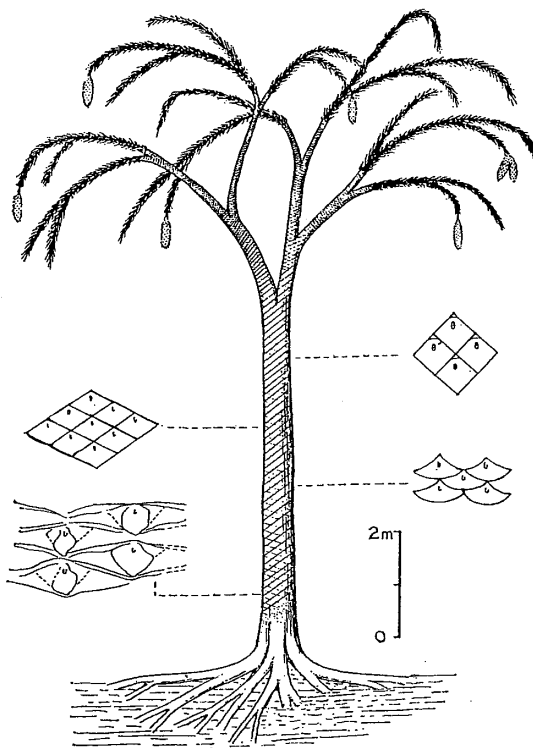
樹幹の表面の“葉”の落ちた跡(葉柄痕^{ようへいこん})の菱形模様の集合が、あたかも魚の鱗のように見えることからその名が付いた。別名「うろこぎ」とも呼ばれる。これが次の時代の石炭紀〔約3億3000万年前〕になると大型化し、^{ろぼく}蘆木(トクサ類: *Calamites*)・^{ふういんぼく}封印木(*Sigillaria*)などの同じ木本性シダ植物とともに、世界の至る所の陸上の湿地帯で大発展し森林を形成するようになる。つまり、デボン紀の“鱗木”は、一般的な石炭紀の鱗木の先祖型ということになり、地球上で最初に植物が上陸したシルル紀に続いて発展した維管束をもった本格的な陸上植物である。ちなみに、これら石炭紀に栄えたシダ植物が倒れて地層中に埋没して化石となり炭化したのが世界の多くの石炭で、18

世紀半ばにイギリスに端を発した産業革命を支えることになる。ただし、日本の石炭はこの時代のものではなく、もっとずっと後の哺乳類の発展する新生代の古第三紀のものである。例外として、大嶺炭田(山口県美祢市)のように、中生代三畳紀後期に形成されたものも稀にある。この場合、後の火成活動の熱の影響で日本では珍しく“無煙炭”となっている。

石炭と言えば、石油とともに化石燃料であり、今はほとんど見る機会もないが、その主な用途は、製鉄(コークスの原料)、燃料、石炭化学の原料などであり、一昔前までは、SL(蒸気機関車)の燃料でもあった。高知では、NHK放送の大河ドラマ『功名が辻』との関連性で開催された『土佐二十四万石博』を記念して、2006年11月23~26日まで、土讃線高知一須崎間をSL[C62]が走った。真っ黒な重厚な車体から白い煙と上り坂では黒煙を上げ、時折汽笛を鳴らしながら土佐路を走る勇



「横倉山産 鱗木」(平田コレクション/高知県立牧野植物園蔵)



「鱗木の復元図と各部位の樹幹表面模様」(Li et al.,1986)

姿を、県内外の多くの鉄道ファンや沿線住民が懐かしく見守っていた。

さて、鱗木は、日本では1950年に最初に東北の北上山地（岩手県）で発見され、次いで、1966年に西南日本の高知県横倉山大平地区で発見され、現在では、阿武隈山地、飛騨山地、九州を含めその産地は数カ所に及んでいる。四国、九州のものは、地質学的には西南日本外帯の「黒瀬川構造帯」（現在では黒瀬川帯）と呼ばれる日本列島では最も古い部類のシルル～デボン紀の地層が分布する帯状の大断層地帯から報告されているものである。四国では、高知県の横倉山（越知町）と鴻ノ森（高知市）の2ヶ所のみであったが、今年になって、地元の熱心なアマチュア研究家の飽く無い調査により新に徳島県からも報告された。全国的に見て、横倉山から産する鱗木は、極めて保存状態が良く、かつ、産出量も多く、古生物学的に資料価値の高いものが採集・報告されている。ただ、10年ほど前の道路工事で、鱗木化石を含む地層の露頭が大部分失われ、残すは崩壊の危険のある箇所のみとなり、今後の採集はできなくなってしまった。一方、一昨年の夏、やはり県内のアマチュアの化石研究家の執念とも言える搜索の結果、横倉山においてこれまで報告されていなかった新たな地域から鱗木の化石が発見され、また新たな学術的資料が付け加わった。

アマチュア研究者による学問への貢献には大きいものがあるが、その一方で、どこの化石産地でもそうであるが、マナーに反してあちこちで乱掘

が目立ち、他人の私有地を所かまわず勝手に荒し迷惑を及ぼすという問題が生じているケースも多いことも忘れてはならない。

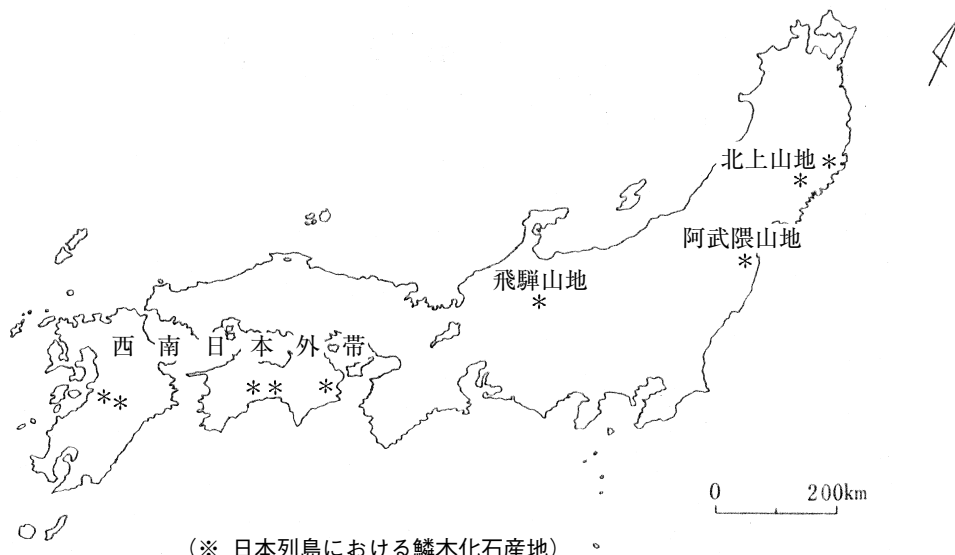
日本で産出する鱗木化石の多くは幹に当たる部分の化石で、内部がほとんど中空であったと考えられるためか、地層の圧密を受けて扁平になっていて、本来の形状はつかみがたい。ただ、極めて稀に、断面が楕円～円形に近いものが見つかっており、直径2.5～3 ㍍ほどの茎（樹幹）を有していたことがわかる。高さはよくわからないが、次の石炭紀の発展した種の本来の鱗木（*Lepidodendron*）では30㍍にも達するようである。

デボン紀の鱗木は、旧アジア～オーストラリア大陸に普遍的に産する植物種で、当時の陸地の分布—古地理—を知る手がかりとなる。特に、オーストラリアや南中国（揚子地塊）*からは横倉山から産するものと同一種が報告されており、横倉山や四国～九州に点在する鱗木を産する地層を含む元々一塊であった微小大陸（黒瀬川地塊）が、かつては、はるか南の赤道付近で、これらの大陸と互いに近い場所に位置していて、同じ植物区に属していたことが想像される。このことは、大陸移動を示す一つの証拠とも言える。

鱗木は、横倉山の歴史に留まることなく、地球の歴史をも知る上で大変重要であり、太古のメッセージを伝えるロマンに満ちた化石であると言える。

* ナンリン 秦嶺山脈以南

（やすい としお／横倉山自然の森博物館副館長兼芸員）



ひゃくたけ

百武彗星 (C / 1996B2) の思い出

片岡 重敦

1996（平成8）年1月31日に鹿児島県のアマチュア天文家・百武裕司ひゃくたけゆうじさんが発見した彗星が猛スピードで地球に接近し、3月25日には1,500万kmまで近づいて今世紀最大の巨大彗星になるという天文雑誌の記事に私は興奮しました。1,500万kmといえば月までの距離の40倍、太陽までの距離の10分の1と正にニアミス！。明るさも1等級になるというではありませんか。私は小学生の時から

指折り数えて30数年待ったハレー彗星が期待はずれだった悔しさもあって、この彗星の雄姿をぜひ我がカメラに収めたい、との熱い思いで“その日”の数日前から機材一式を車に積み込み、日々明るくなっていく彗星を自宅の駐車場で撮影しながら待機していました。

しかし、3月25日は朝から天気が悪く、夕方になってもべた曇り。何度か外に出て空を見上げて

も一向に回復きざの兆しがないので、諦あきらめて寝ようと思いつきながら深夜11時過ぎにもう一度空を見ると、雲が切れ始め、北天高く満月と見まがうばかりの彗星頭部と頭上を越えて全天を跨またぐような尾が雲間から見えているではありませんか！。私は深夜であることも忘れて思わず「オーッ」と大声をあげ、車に飛び乗って観測ポイントの横倉山第1駐車場へ向かいました。到着したのは日付が3月26日てんゆうに変わった頃。天佑か、有難いことに湿度は高いものの雲ひとつない晴天になっています。そして本当に満月のように輝く巨大で明るい頭部と北斗七星を跨ねらぎ頭上を越えて伸びる尾！。2日前とは比べものにならない巨大彗星の姿に感動しながら夢中で撮影を始めました。

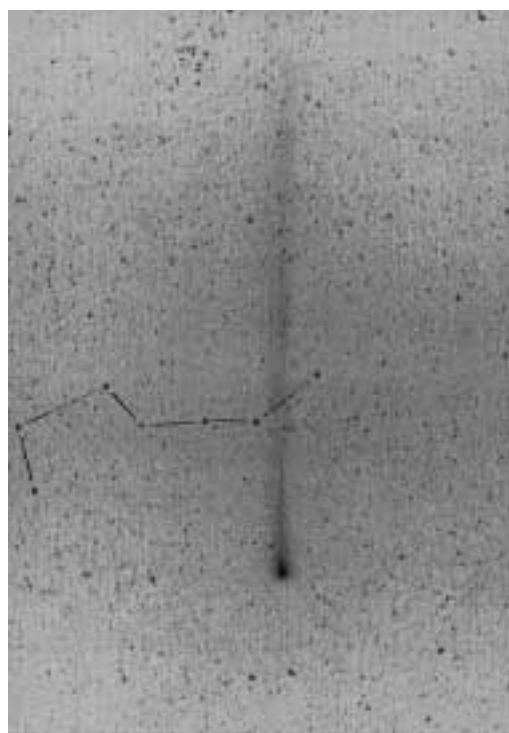
撮影は2台のカメラを使用しました。1台は中判カメラで固定撮影し、恒星の日周運動と違う軌跡を描く彗星を狙いました〔写真1〕。もう1台



〔写真1〕60分間の日周運動(中央上の太線が百武彗星 右下が北極星) [横倉山第1駐車場]



〔写真2〕28ミリ広角による全景



〔写真3〕北斗七星を跨ぐ長い尾（白黒反転）

は35ミリ判カメラで、望遠鏡に載せてガイド撮影し彗星の全景を狙いました。焦って望遠鏡の極軸合わせが不十分だったため甘いガイドになっていますが、彗星の雄大な姿を切り取ることに成功しました〔写真2, 3〕。

この後も天候や月明かりに邪魔されてその雄姿を多くの人に見てもらえないまま5月1日に太陽をかすめて宇宙の彼方へ去っていった百武彗星ですが、その周期は17,000年とか。前にも書きまし

たが、次の回帰まで我々人類はこの地球上に存在し得るでしょうか。

この彗星の発見者百武裕司さんは、2002年4月に51歳の若さで他界されました。永遠の命を得て百武彗星と共に遥かな宇宙を旅しているのでしょうか。ご冥福をお祈りいたします。

合 掌

（かたおか しげあつ／前横倉山自然の森博物館館長）

博物館ニュース

企画展：『おもしろアニマル フォトコンテスト&写真展』

〔2006年9月23日（土・祝）～11月5日（日）〕

“ストレス社会”と言われる現代社会では、いろんな仕事上の悩み、職場あるいは近隣の対人関係からくるストレス等で、現代人は精神的な疲労（心労）に陥る機会が多い。そんな時、疲れた心を癒してくれるものの一つが自然や生きものである。身近な動物やペットの表裏のない純粋な何気ない表情や行動に心を打たれ、感動を覚え、また、ユーモアを感じ、何となくほっとした気分させられることが多い。このような動物のもつ底知れない魅力を対象に、身近な動物のユーモアな写真や、珍しい、芸術的な写真を募集するコンテストを行ってみたい。

『みんなで選ぶ！おもしろアニマルフォトコンテスト』として募集（2006年5月25日～8月31日）した応募作品：67点を会場に一同に展示し、ユーモア賞・スクープ賞・ナ

イスアート賞（各3名）を入場者自らに審査して選んでもらうというユニークな方法を採用して決定することにした。

猫、犬、鳥、魚、昆虫、亀、山羊など、ペットや野生の動物を対象としたユーモアで可愛く、珍しい写真が集まり、会場を訪れるお客さんの目を楽しませてくれた。「おもしろかった」「楽しかった」という感想が圧倒的に多く、企画展開催の意図が達成された。



各賞は次の通りとなりました。《敬称略》

〔ナイスアート部門〕

- ◎金賞：「あおばずく三兄弟」
(竹森雅孝／仁淀川町)
- 銀賞：「芋虫くん2」
(横山 豊／大豊町)
- 「イダの群れ」
(竹森雅孝／仁淀川町)



〔スクープ部門〕

- ◎金賞：「子育て中」
(斎藤政広／越知町)
- 銀賞：「ハコガメ誕生!!」
(近藤史哉／高知市)
- 銅賞：「なんじゃ
こりゃあ!!!!」
(黒原由佳／越知町)



〔ユーモア部門〕

- ◎金賞：「モォ〜 きゅうくつ
だワン 大きな箱に
変えてほしいヨ〜」
(森田文子／佐川町)
- 銀賞：「将棋」
(野島志夫／高知市)
- 銅賞：「ドラの生態」(出口祐男／高知市)



企画展：『ネイチャーイラストレーター 松下(宮野)和江の自然よもやま話—北海道でも高知でも—』

〔2006年12月23日(土・祝)～2007年1月21日(日)〕

「植物は、同じ種類でも自生地の違いによりその姿・形・大きさなどさまざまに変え、それぞれの地域の環境に適応して生きている。その違いに気付くことができれば、植物を観るのが楽しくなってくる。」

本企画展では、北海道から高知に移住してきた作者の目を通して、両地域に共通して見られる植物について、そのさまざまな違いや各植物にまつわる興味深い話題を、写真と漫画のイラスト・サイエンスエッセイの3点をセットにしたパネル約35点で面白・おかしさを交えながらわかりやすく比較紹介し、身近な自然の「再発見」をアピールした。

「北海道と高知でずいぶん違うのだと驚きました」「南と北の自然環境の違いが植物に与える影響を興味深く拝見しました」「日頃何気なく見ている草花だけど、また違った目で見られて新発見!」「野の花の違いや謂れに何とも嬉しい出会いがありました」などの感想があった。



企画展：『自然の森・絵画展』

〔2006年10月1日(日)～15日(日)〕

〔主催：横倉山自然の森博物館・絵楽会・パステル画の会・越知平家会／後援：越知町文化推進協議会・越知町商会・越知町観光協会・博物館友の会〕

越知町の「コスモスまつり」と博物館の秋の企画展：『おもしろアニマルフォトコンテスト&写真展』に時期を合わせ同時開催した。

越知町出身の野並のぶなる充温画伯(大阪在住)

とその門下生による「絵楽会」の横倉山をテーマとした作品：15点(写真下)と、「ふれあいパステル画の会」〔講師：伊藤信晃(越知町)〕のパステル画作品：52点(写真上)、それに、「越知平家会」の安徳天皇陵墓参考地・行在所跡等の写真：13点を2階と3階展望ロビーに展示し、3階ではコーヒーとお菓子で観覧者をもてなした。

町民を会員(一部友の会員)とする各会の活動成果である作品の発表と、地元の人に関心をもってもらい、博物館への入館者増に繋がればとの、町民の暖い心遣いの協力的な企画展であった。

町民を会員(一部友の会員)とする各会の活動成果である作品の発表と、地元の人に関心をもってもらい、博物館への入館者増に繋がればとの、町民の暖い心遣いの協力的な企画展であった。

町民を会員(一部友の会員)とする各会の活動成果である作品の発表と、地元の人に関心をもってもらい、博物館への入館者増に繋がればとの、町民の暖い心遣いの協力的な企画展であった。

町民を会員(一部友の会員)とする各会の活動成果である作品の発表と、地元の人に関心をもってもらい、博物館への入館者増に繋がればとの、町民の暖い心遣いの協力的な企画展であった。

町民を会員(一部友の会員)とする各会の活動成果である作品の発表と、地元の人に関心をもってもらい、博物館への入館者増に繋がればとの、町民の暖い心遣いの協力的な企画展であった。

W.L.Y. (We love Yokogura)〔越知中学校総合学習；独立行政法人 科学技術振興機構支援〕

〔2006年6月16日～2007年2月9日〕

越知中学校の総合学習として、地元横倉山の貴重な植物、地層・化石、歴史等について、いろんな専門的な知識を持った講師の協力を得て調査・研究を行い、その調査結果をまとめて資料目録・図録・標本等を展示・発表することを目的とする。それにより、横倉山の自然に対する理解をより深め、自然の豊富な故郷を愛する気持ちを養うことをも同時に目標とする。

主なねらいは、1. 粘り強く丁寧に取組もうとする力、2. 課題に向かって自ら積極的に活動しようとする力、3. 課題を実現するために、手段・方法を考え調べようとする力、4. 調査結果を資料やパネルにするなどの表現する力などを養うことである。



〔タヌキの解剖〕

越知中学校職業体験

2007年1月22日(月)～26日(金)〔協力：植物研究家・大倉浩典〕

地元越知中学校2年生の生徒(2名)を対象に、「職業体験」として5日間博物館の仕事を体験してもらう。それぞれの生徒は、博物館の仕事に興味がある、横倉山の偉大さをもっと知りたい、という動機があつての体験希望であつた。

博物館の仕事の根幹をなす作業である、資料を収集し、整理して展示するまでの行程を主に経験してもらう。主な作業は、1. 横倉山の巨木調査、2. 植物標本の作製、3.

化石の採集とその処理(薬品処理・クリーニング)、4.

化石の写真撮影と資料登録(資料カード・パソコン)、5. パソコンを使った企画展のチラシ作りなど。

博物館のような社会教育施設の役割、存在意義を理解するにはまだ早いかもしれないが、諸々の博物館の“裏の仕事”の一端を知り、有意義な体験となつたことを願いたい。



〔巨木調査〕

友の会だより

〔伊吹山の自然と山内一豊ゆかりの長浜城視察研修〕

2006年10月28日(土)、29日(日)〔講師：植物研究家・恒石直和、参加者：20名(内事務局2名)〕

今年は、草本植物と薬草の宝庫で、牧野富太郎博士も度々訪れた伊吹山(滋賀県)に博士の足跡を訪ね、植物観察を行うことにした。いつものように、行きバスの中で、「Q & A」で“事前学習”をやりながら目的地に向かった。

伊吹山は標高が1,377mと高く、山頂の気温は平地から約10℃も低いため冬の到来が早く、花は7月中旬から8月中旬の真夏が一番の見頃ということで、残念ながらこの時期はキンバイソウ、リンドウなどがわずかに見られただけだった。

伊吹山には、伊吹山の「イブキ」という名前の付いた植物が26種類もあり、コイブキアザミ、イブキアザミ、ルリ



〔伊吹山山頂〕

トラノオ、イブキタンポポなど伊吹山の固有種も多いのが特徴である。特に、登山道沿いには、背の高いコイブキアザミや薬草のオオヨモギが目立ち、後者は良質の「伊吹艾」の原料として用いられる。ちなみに、26種類のうち、牧野博士が命名したのは、イブキアザミだけ1種である。

2日目は、彦根藩主・井伊家の居城である彦根城(天守閣：国宝)とNHK大河ドラマ『功名が辻』で取り上げられた土佐初代藩主・山内一豊が、元羽柴秀吉の居城であつたものを徳川家康から拝領し出世城として知られる長浜城を視察し、見聞を広める。

〔クリスマス・リース教室〕

2006年12月16日(土)〔講師：菅谷美恵子、小田春香、参加者：21名〕

毎年恒例の、人気の高い友の会の教室であるが、材料の確保が年々難しくなり、今回が最後となるかもしれないという。最後を飾り、皆思い思いのクリスマスを賑わす素晴らしいリースが出来上がった。

講師の先生、協力者の方々、本当に長い間ご苦勞様でした。



横倉山ミニ歳時記

■クマガイソウ(和名：熊谷草)

ラン科の多年草。花期は4～5月。茎の上端に放射状の脈を多数もつた大きな直径10～20mmの扇状の葉を対生させ、そこから上方に長く伸びた花軸の先端に花を付ける。花は唇弁が袋状にふくれ、その形が源平の合戦の一ノ谷の戦い(1184年)で平 敦盛を討った源氏方の熊谷直実の背負った母衣(矢除けの布製の袋)に似ているところからそう呼ばれる。

一般に花は淡紅紫色の脈の入った淡緑色であるが、ごく稀に白色のものがある。本標本は、横倉山南斜面の民家の裏山で見つかったものである。

これと対照的なものに、花期が5～7月の初夏で、花が全体的に紅紫色で、平 敦盛の背負った母衣に見立てた、同じラン科のアツモリソウ(和名：敦盛草)がある。

いずれも、ラン科の植物で花が変わっているため、マニアによる乱獲によって最近では減多に見ることができなくなりました。



〔写真提供：斎藤政広氏〕

〔平成19年度博物館行事予定〕

- 3月3日(土) 博物館協議会
- 3月24日(土)～5月6日(日)
企画展：『西村洋一画文集出版記念展—風を紡いで—』
- 7月21日(土)～9月2日(日)
南極観測50周年記念企画展：『南極—その不思議と魅力—』
- 7月29日(日) 夏休み博物館教室〔植物〕
- 8月5日(日) 夏休み博物館教室〔昆虫〕
※または、8月4日(土)、5日(日) 夏休み博物館教室〔昆虫・植物・(天体)〕〈四国カルスト〉〔1泊2日〕
- 8月11日(土) 夏休み博物館教室〔工作〕
- 8月19日(日) 夏休み博物館教室〔化石〕
- 9月22日(土)～11月4日(日)
開館10周年記念写真展：『光の造形—月の意匠・森の粧い—』(仮称)
- 9月27日(木)〔雨天の場合は28日(金)〕
開館10周年記念：『観月会』(博物館3階 展望ロビー)
- 12月8日(土)～2月9日(日)
企画展：『昔懐かしい越知町の写真展 Part II』

〔博物館友の会「フォレストクラブ」の平成19年度の活動予定〕

- 4月8日(日) 旧松山街道登山
- 4月15日(日) 草木染め教室
- 5月3日(木・祝) ^{いなむらやま} 稲叢山アケボノツツジ観察会
- 5月5日(土・祝) 呈茶(博物館3階展望ロビー)
- 5月19日(土) 友の会運営委員会
- 5月26日(土) 友の会総会
- 6月3日(日) 仁淀川水質調べ〔身近な水環境の全国一斉調査〕
- 6月27日(水) ヒメボタル観察会(横倉山杉原神社)
- 8月28日(火) 夏の星空観察会—皆既月食—
- 9月 秋の横倉山ハイキング—三嶽古道—
- 10月27日(土)、28日(日) 安藤建築を訪ねて—地中美術館・成羽町美術館と瑠璃光寺五重塔(国宝) 視察研修の旅—〔1泊2日〕
- 横倉山遊歩道整備—三嶽古道標識設置—
- 12月 炭焼体験
- 2008年1月1日 横倉山畝傍山眺望所で初日の出を
- 1月 冬の星空観察(博物館3階展望ロビー)

スタッフの声、声、声

〔西森館長〕 この間、博物館3階展望ロビーで開催されたスターウォッチングに参加した。多少雲は出ていたが、夜空に星がきれいに輝き、説明を受けた目的の星群を観察することが出来た。こんなにゆっくりと星を見るのは、いったい何年ぶりだろうか。スターウォッチングは単に星を観察するだけではなく、光害、大気汚染等大気環境状況を調べることも一つだとか、また全国一斉に調査をする日も決まっているという…。

〔西川〕 越知町と交流のある広島県芸北地域へ行ってきました。牧野富太郎の歩いた八幡高原にも雪は無く、地元の古老の話だと120年ぶりの暖冬だそうで、カキツバタの開花も早くなるかもしれません。役場前の古桜も芽が大きく膨らんで今年の冬はちょっとおかしい。寒いのが嫌いな私には嬉しいけれど、自然の中にいる動物や植物たちはどう思っているのやら。

〔安井〕 今年の10月で博物館は開館10周年という一つの節目を迎える。本当にアツという間の時間の経過であった。その間館長、臨時職員が何度か入れ替わったが、それぞれの役割、

個性・技能を活かし一致団結し、また、多くの人たちからの支援を受け、いろんな企画展や教室が開催され、博物館の歴史が刻まれてきた。その都度さまざまな人たちとの出会いや感動があり、振り返ると辛く苦しいこともあったがそれも含め今はとても懐かしく思う。節目にふさわしく、今年が思い出に残る充実した年となるようお願いしたい。

〔小松〕 食卓に“菜の花”がでると、もうすぐ“いかなごの釘煮”がやってくる。お弁当のおかずになんか詰めて、僕には山葵の葉っぱもほんの少し。子どもと一緒にスマイルの花を見に行きたいなあ。

〔伊藤〕 2月の終わり頃からカエルが鳴き始めました。まだまだ声は小さいですが、「春がやって来たんだな…」と思いました。カエルの大合唱が毎年待ち遠しくてたまりません。

〔小野〕 夏の終わりに我が家へやってきた灰色のハムスター。しかし、不思議なことに冬のある日突然、全体的に灰色が薄くなり白く変化していました。今年は暖冬と言われていたけれど変わった所で雪化粧を見る事ができました。

高知県越知町立

横倉山
THE YOKOGURAYAMA
NATURAL FOREST
MUSEUM, Ochi

自然の森博物館

〒781-1303 高知県高岡郡越知町越知丙737番地12
TEL0889(26)1060 FAX0889(26)0620
http://www.town.ochi.kochi.jp/

- 開館時間：午前9時より午後5時まで
最終入館は午後4時30分
- 休館日：毎週月曜日(祝日の場合は翌日)
12月29日から翌年の1月3日まで
- 入館料：大人……………500円(※各20名以上
の団体は100円引き)
高校・大学生……………400円
小・中学生……………200円
- 越知への交通
高知—JR特急約30分—佐川—バス約15分—越知
JR普通約50分

